

小学生とその保護者及び教職員の食品ロス削減に関する意識について

徳広千恵・池田千恵・上野愛実・清水瑠璃
下元優花・妹尾優一郎・鉄野奈々

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第66号抜刷）

報告・資料・研究ノート

小学生とその保護者及び教職員の食品ロス削減に関する意識について

Awareness Survey about Reducing Food Loss among Elementary School Children, Parents, and Teachers

徳広千恵¹⁾†・池田千恵²⁾・上野愛実²⁾・清水瑠璃²⁾
下元優花²⁾・妹尾優一郎²⁾・鉄野奈々²⁾

キーワード：食品ロス削減、食育、地場産物、意識、体験活動

目 的

食べ物の約6割を海外からの輸入に依存しているにもかかわらず、まだ食べられるのに捨てられている食品（食品ロス）がある。これは、食べ物を大切にする心の欠如や自分に必要で適切な量や種類が把握できていないことから生じることが多いと考えられる。

このことから、食品ロス削減意識の向上に食育の推進という観点を盛り込み、大学生が小学生と地域の土壤、気候、風土、地域の資源等を学ぶとともに、食品ロス削減に向けての意識や行動について調査・研究を行い、上級生から下級生に残さずおいしく食べることの大切さを伝えることができる媒体を作り、事業実施後の評価を行うことを目的に研究を行った。今回は、食品ロス削減に関する意識や行動について調査の分析を行ったので結果を報告する。

方 法

対象：津山市立広戸小学校の児童と保護者及び教職員

児童 57名（回収率100%）

保護者 38名（回収率90.5%）

教職員 15名（回収率83.3%）

時期：令和2年10月

調査方法：自記式質問紙を用い、無記名による調査を実施した。児童については学校の授業時間中に記入し、担任が回収した。保護者については、担任が回答内容と記入者がわからないように封筒に入れた状態で配布し、回収を行った。教職員は、休憩時間等に記入し、各自が回収ボックスに提出した。

調査項目：児童については「食品ロス」という言葉の認識、学校給食用食材の地産地消の認知状況、家庭での食事の様子、残食の状況及びその理由、残食への意識等の5項目、保護者及び教職員については「食品ロス」という言葉の認識、地産地消や食育、食品ロス削減に関する意識や行動等15項目

解析方法：統計処理にはエクセル統計BellCurve for Excel Ver.2.21（株式会社 社会情報サービス）を使用し、母比率の比較には対応のない母比率の差の検定により有意水準 $p<0.05$ で有意差ありとした。

結 果

（1）食品ロスという言葉の認識

「食品ロスという言葉を知っている」と回答した児童は36.8%、「いま、知った」と回答した児童は63.2%であった。「知っている」、「どちらかといえば知っている」と回答した保護者は94.7%、教職員は100%だった。食品ロスという言葉は、保護者、教職員の間では広く知られていたが、児童にはあまり知られていない

†責任者

¹⁾ 美作大学生活科学部食物学科

²⁾ 美作大学生活科学部食物学科学学生

ことがわかった。

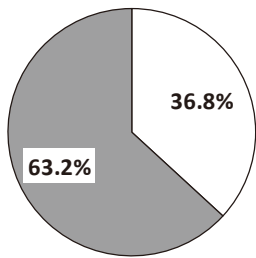


図1 食品ロスという言葉の認識（児童）

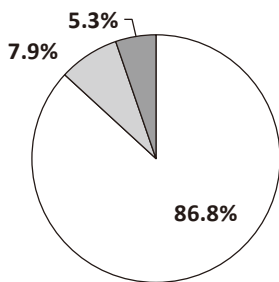


図2 食品ロスという言葉の認識（保護者）

（2）地元産の食材

給食に津山産の食材が使われているのを「知っている」と回答した児童は全体で45.6%だった。「知っている」と回答した1年生は50.0%、2年生は33.3%、3年生は23.1%、4年生は66.7%、5年生は40.0%、6年生は80.0%であり、高学年のほうが知っている割合が高い傾向が見られた。

地元や県内産の食材を使用した場合、子どもに「いつも教えている」、「たまに教えている」と回答した割合は保護者で34.3%、教職員で46.7%であった。地元や県内産の食材を使用した場合、子どもに「教えている」と回答した保護者、教職員の割合と、「知っている」と回答した児童の割合が同程度となったことから、児童は親や教職員の教えを理解していることがわかった。

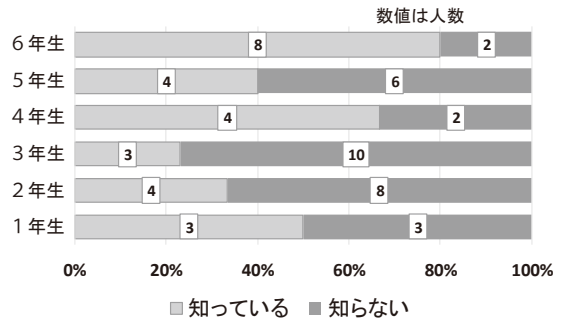


図3 学校給食用食材の地産地消の認知状況

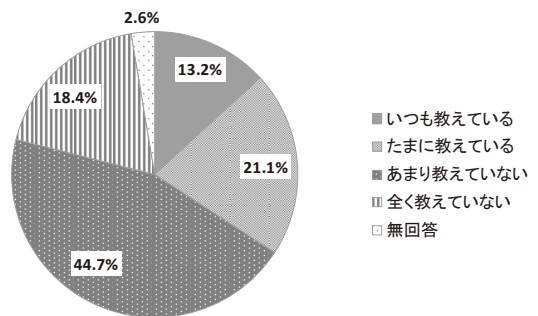


図4 地元産の食材使用時の伝達状況

（3）家庭での食事の様子

家庭では、しつけの一環としての食育が実践され、楽しく食卓を囲んでいることがわかった。

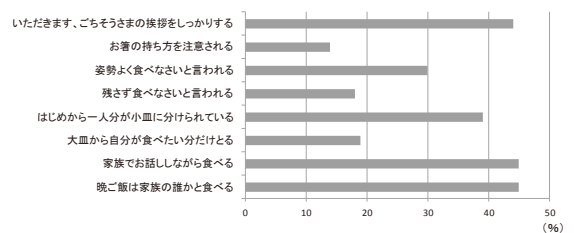


図5 家庭での食事の様子

（4）いただきます、ごちそうさまの挨拶

家庭で、「いただきます、ごちそうさまの挨拶をしっかりとる」と回答した児童は77.2%であった。子どもに食事をさせる時、挨拶について「既にできているので教える必要がない」、「いつも教えている」、「たまに教えている」と回答した保護者の割合は94.7%、教職

員で73.3%であった。

大部分の児童は、保護者や教職員の教えを実践していることがわかったが、「挨拶をしない」と答えた児童も22.8%いた。

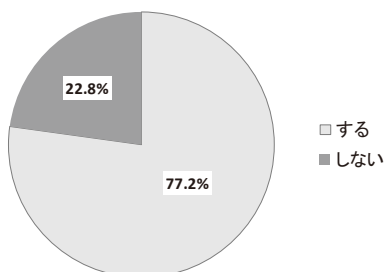


図6 いただきます、ごちそうさまの挨拶（児童）

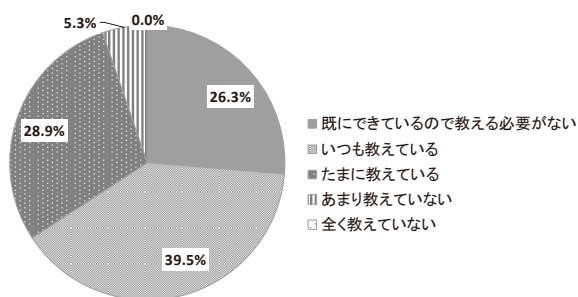


図7 いただきます、ごちそうさまの挨拶（保護者）

（５）残さないための声かけ

子どもに対して食事を残さないように「いつも話している」、「たまに話している」と回答した保護者は92.1%、教職員は80.0%であった。「残さず食べなさいといわれる」児童は31.6%であった。

保護者や教職員の話しかけと児童の受け止めに差がみられた。

（６）食事を残す割合と理由

食事を週に1～2回以上残すことがあると回答した児童は学校給食で35.1%、家庭の食事で40.3%であった。児童が食事を残す理由として学校給食では「嫌いなものがある」65.0%、「量が多い」45.0%、「味が好きではない」45.0%、「時間が足りない」40.0%、「アレルギーのため」21.7%、「太りにくい」20.0%、「食味が悪い」15.0%、その他0.0%であった。

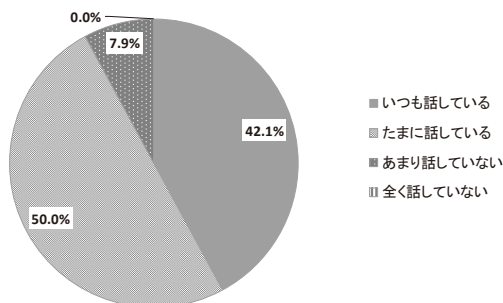


図8 残さず食べなさいと話している（保護者）

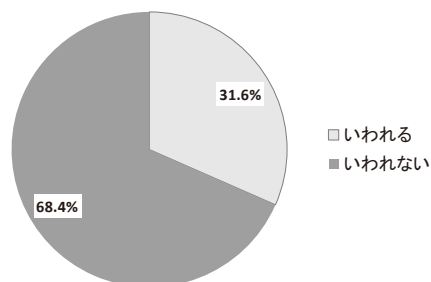


図9 残さず食べなさいといわれる（児童）

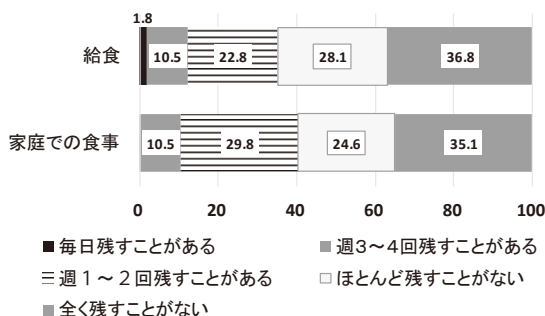


図10 食事を残す割合（学校給食、家庭の食事）

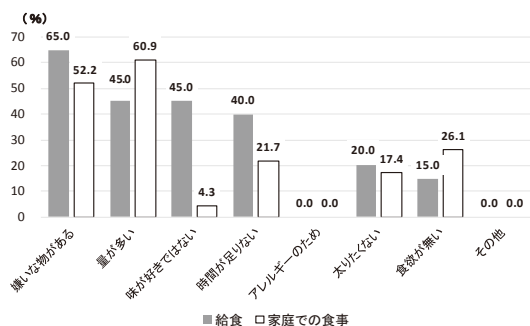


図11 食事を残す理由（学校給食、家庭の食事）

りたくない」20.0%、「食欲がない」15.0%であった。家庭での食事では、「嫌いなものがある」52.2%、「量が多い」60.9%、「味が好きではない」4.3%、「時間が足りない」21.7%、「太りたくない」17.4%、「食欲がない」26.1%であった。特に「食事の量が多い」、「味が好きではない」という回答で学校給食と家庭では残す理由に大きな差がみられた。

(7) 食事を残さないように教えていること

子どもに対して食事を残さないように教えていることの記載では、保護者全体で68.4%の回答が得られた。そのうち、92.3%がもったいないお化けが出るよ、お母さんが一生懸命作ったから全部食べてねというような「児童の心やしつけに関する内容」であった。次に多かったのがおじいちゃんやお父さんが大変な思いをして作っているんだよ、作ってみたら大変だったよねというような「生産者の方々への感謝に関する内容」で46.2%、三番目に多かったのは、ご飯を食べられない子がたくさんいるんだから残さず食べよう、というような「貧困に関する内容」で26.9%、四番目に多かったのは、大きくなるために食べようね、今しっかり食べることが身体を作る基になるというような「身体の成長に関する内容」で23.1%であった。

「児童の心やしつけに関する内容」と「生産者の方々への感謝に関する内容」は、多くが共起していることがわかった。

自由記載（抜粋）

・お米は種を植えて百日もかかってお米になるんだよ、とかアフリカの難民などがテレビで食べ物食べられなくて栄養失調で大人になるまで成長できなく小

さくして死亡してしまうことなど映像を通してや、それ以外の時にも話し、食べ物大切さを話している。

- ・生ゴミ行きはかわいそうだよ。
- ・自給自足CMが流れたときに、あれだけ頑張ってやっとなこれだけの米しか作れないんだよ。
- ・命をいただいているんだから、食べ物は粗末にしてはいけない。
- ・昔の人はお米の粒を残すと目が見えなくなるといっていたよ。
- ・生産者が心を込めて育てた命をいただく。食品ロスは環境問題に繋がる。
- ・元気でいるためにお皿にある分は食べよう、と声かけをする。

(8) 食事を食べ残さない工夫

食事を食べ残さない工夫で、「食べきれない時は捨てずに保存している」と答えた保護者は73.7%、教職員は73.3%であった。「食材はできるだけムダなく使いきる」と答えた保護者は63.2%、教職員は60.0%であった。「買い物に行く前に冷蔵庫に何があるか見る」と答えた保護者は55.3%、教職員は80.0%であった。「消費期限・賞味期限を正しく理解して参考にしている」と答えた保護者は39.5%、教職員は73.3%であった。「保存した残り物は忘れず食べるようにしている」と答えた保護者は47.4%、教職員は40.0%であった。「外食時、食べきれる量を注文する」と答えた保護者は44.7%、教職員は66.7%であった。「食べきれる量だけ作る」と答えた保護者は42.1%、教職員は53.3%であった。「バラ売りなどを活用し必要な量だけ購入する」と答えた保護者は21.1%、教職員は40.0%であった。「冷蔵庫は詰め込みすぎないように整理している」と答えた保護者は21.1%、教職員は53.3%であった。「近所の人にお裾分けする」と答えた保護者は10.5%、教職員は20.0%であった。「外食時、残した料理を持ち帰るようにしている」と答えた保護者は5.3%、教職員は6.7%であった。

保護者が行っている食事を食べ残さない工夫で一番多かったのは「食べ切れない時は捨てずに保存してい

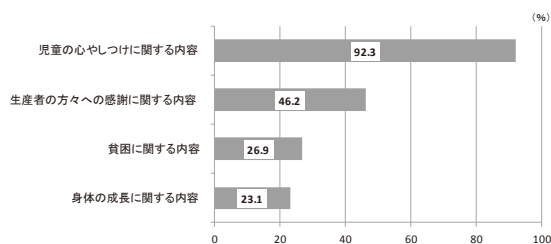


図12 食事を残さないように教えていること

る」、次は「食材はできるだけムダなく使いきる」、三番目は「買い物に行く前に冷蔵庫に何があるか見る」であった。教職員では、一番多かったのは「買い物に行く前に冷蔵庫に何があるか見る」、次は「消費期限、賞味期限を正しく理解して参考にしている」と「食べ切れない時は捨てずに保存している」であった。

「買い物に行く前に冷蔵庫に何があるか見る」、「消費期限・賞味期限を正しく理解して参考にしている」、「冷蔵庫は詰め込みすぎないように整理している」について教職員の方が答えた割合が高く、特に保護者と教職員に有意な差がみられた。

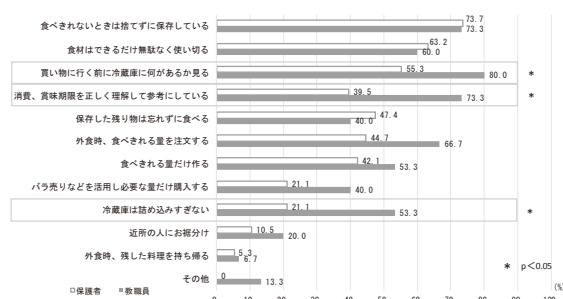


図13 食事を残さない工夫

（9）食品ロスに関する情報の入手方法

「食品ロスに関する情報をどのように入手していますか」の質問に対し、「学校での授業参観、保護者会などの行事や講話」と答えた保護者は10.5%、教職員は13.3%であった。「学校からの保健だよりや給食だよりなどの配布物」と答えた保護者は36.8%、教職員は40.0%であった。「地域の回覧板等、自治会地域でのイベントやPR」と答えた保護者は5.3%、教職員は13.3%であった。「食品等を提供する企業、店舗等のイベントやPR」と答えた保護者は13.2%、教職員は26.7%であった。「市や県の広報誌等、行政機関のイベントやPR」と答えた保護者は7.9%、教職員は26.7%であった。「新聞、テレビ、雑誌、インターネット等」と答えた保護者は63.2%、教職員は80.0%であった。保護者、教職員とも食品ロスに関する情報の入手方法は「新聞、テレビ、雑誌、インターネット等」、「学

校からの保健だよりや給食だよりなどの配布物」、「食品等を提供する企業、店舗等のイベントやPR」の順であり、「地域の回覧板等、自治会地域でのイベントやPR」と答えた割合は低かった。

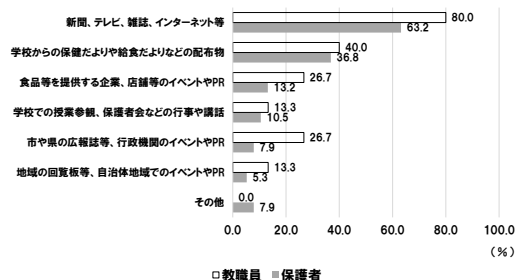


図14 食品ロス削減に関する情報の入手方法

考察及びまとめ

今回、広戸小学校の児童、保護者、教職員に食品ロス削減に関する意識調査を行った。広戸小学校では、地域の保護者や生産者の方々のご協力のもと、栽培体験や収穫体験、環境学習が積極的に行われていた。児童や保護者、教職員は、食品ロスという言葉もよく知っており、食品ロス削減につながる意識を持ち、行動もしていた。

食品ロス削減に向けては、地域の風土や産業を理解したり、食料の生産に関わる様々な人への感謝の気持ちを持ったりすることが重要であると考えられるが、児童は、学校給食に津山産の食材が使われていることもよく知っており、家庭でも家族とともに楽しく食卓を囲んでいる様子が見て取れた。食べものを残すことが悪いという自覚ももっており、「いただきます、ごちそうさま」の挨拶など食に関する様々な指導やしつけの一環としての食育が行われていることもわかった。

しかし一部では、「いただきます、ごちそうさまの挨拶をしない」と答えた児童が22.8%いた。いただきます、ごちそうさまの挨拶をしっかりすることは、食べ物への感謝の気持ちを育てることにつながるため継続的な家庭での声かけが求められる。

保護者からの食事を残さないための声かけの自由記

載欄には、たくさんの記載があった。一番多かったのは「児童の心やしつけに関する内容」であり、「生産者の方々への感謝に関する内容」が二番目に多かった。これは、児童の保護者や祖父母など身近に作物を育てているという、この地域ならではの環境があるからだと考えられる。このような環境を強みにし、農業体験と食育を関連付けていくことで児童自身の食べ物を大切にすることが高まり、保護者や教職員の教えがきちんと伝わるのではないかと考えられる。

保護者、教職員の食事を食べ残さない工夫では「買い物に行く前に冷蔵庫に何があるか見る」、「消費期限、賞味期限を正しく理解して参考にしている」、「冷蔵庫は詰め込みすぎない」という項目で有意な差がみられた。忙しい教職員は買い物も短時間で済ますため、日頃から冷蔵庫の中身を整理して確認しやすくなっているのではないかと考えられる。また、研修等の機会も多く、ニュースなどからたくさんの情報を得ていることも理由の一つだと考えられる。これらのことから、学校からの配布物や講演会など、児童だけではなく保護者にも食に関する情報を提供する場を設けることで、保護者の食の知識が深まり、食品ロス削減意識の向上につながると考えられる。さらに、「地域の回覧板等、自治会地域でのイベントやPR」から得る情報が少なかったことから、今後の国民運動としての食品ロス削減運動の推進が期待される。

また、児童の食事を残す理由では、特に家庭では「食事の量が多い」、給食では「味が好きではない」という回答であり、家庭と給食では残す理由に違いがみられた。学校食育センターの聞き取り調査でも、家で食べ慣れていないおかずは残食が多いということであった。家庭では、いろいろな食品や料理に親しませることが重要であり、学校食育センターでは、児童に献立のねらいなどをさらにきめ細かく伝えるなど、家庭、学校給食、それぞれで改善できるような取り組みの工夫が必要だと思われる。

また、実際に田植えや稲刈りやサツマイモの苗植えなどの体験活動を通じて、食べ物を作ることは、想像していた以上の手間や時間がかかることも学んでい

た。友達や地域の方と一緒に体験し、野菜や稲が日々成長していく様子を見ることも児童にとって、その思いを深めたことと思われる。そのことにより、生産者への感謝の気持ちが芽生え、給食の残食の減少が期待される。

謝 辞

本研究を実施するにあたり、快く受け入れてくださいました、津山市立広戸小学校の御藤校長先生はじめ、教職員の皆様に心よりお礼申し上げます。またご協力いただきました広戸小学校の児童の皆様、保護者の皆様、草加部学校食育センターの皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 農林水産省:食品ロスとは：
https://www.maff.go.jp/j/shokusan/recycle/syoku_loss/161227_4.html 2020年10月30日 アクセス可能
- 2) 消費者庁：日本の食品ロスの現状
<https://www.maff.go.jp/j/press/shokusan/kankyoi/attach/pdf/200414-1.pdf> 2020年10月30日アクセス可能
- 3) 糸山智栄 石坂薫 原田佳子 増井祥子 未来にツケを残さない フードバンクの新しい挑戦 高文研 東京都 2017年
- 4) 原田佳子 食品ロスから見えてくるもの フードバンク活動の実践を通して 人権21・調査と研究 第264号 おかやま人権研究センター 岡山市 2020年 p.80-88.